
巻 頭 言

微生物資源の資源について考える

日下 大器

当学会の名称「日本微生物資源学会」にある資源について考える。

資源はわれわれ人類の生活を豊かにする生産活動のもとになる物質、エネルギー源の総称で、具体的には鉄鉱石、石油、木材、ウラン等を指している。資源は人類の死命を制する物質であるから人類はその確保に必死の努力を続けている。その一環として、微生物学者はこのような物質を微生物に求めようとして「微生物資源」という概念を産み出したのだと私は思っている。

わが国、日本は比較的資源の乏しい国であるということになっている。

私事になるが、私が生まれた昭和14年ごろは「産めよ殖やせよ。皇国の臣民を」という時代で、赤ん坊の誕生は大いに祝福された。それから8年ほど後の終戦後のベビーブームで私が中学生だった昭和27年ごろの小学校は60人学級で、しかも午前、午後の2部授業であった。われわれは長ずるに従い、競争が激しくなり、年配者からは穀潰し人口が増えてどうしようもないと思われるようになった。私がそろそろ社会に目を向けようとした昭和30年頃、一国を率いる時の首相が「日本には資源は少ないが、労働者という資源がいっぱいある」といった。私は策のない首相の「言い逃れ」と思って笑って聞いていた。そうしたら外国の企業家がこぞって「日本には高度の教育を受けた均一の労働者が多数居る」と言い出した。その結果、穀潰し人口が高付加価値生産人口となり、そこで得た収入でも消費する消費人口ともなり、経済は活発になり、日本は経済的に大きく成長し、人不足と言われる程になった。無いと思われていた資源が実はあったという経験をしたことがある。

このように資源は資源として始めから存在するのではなく、そうと気づいて、始めて資源になるものである。燃える水として奈良時代に知られていた物体が石油という資源になったのは、わずか100年程前に科学者が有機化合物の宝庫であることを明らかにした時からである。微生物資源も資源であると気づく研究者が出るまでは単なる微生物である。微生物は一度見失うとなかなか現れないものだから、保存番号をつけて保存しておかねばならない。保存さえしておけば資源であると気づく時があるかもしれないからである。ここに保存の意味がある。これを忠実に守っているのが菌株保存機関である。保存機関を支えるのはキューレーターである。彼らは保存機関の菌株を良く研究して、それはどのような価値があるのか、つまり菌株のもつ意味を見出す（資源化する）ことができる研究者である。

微生物資源学会となってから個人会員が著しく増えた。彼らは入会すれば資源としての微生物に特権的に接することができると思っているのかもしれない。それはそれで、もっともな考えである。しかし個人会員は菌株の研究者である。自分の実験室の菌株の中から自分の研究の対象となる菌株を取り上げ、それが人類にどんな意味を持っているのかを徹底的に研究している人達である。それは保存機関の菌株を資源化しているキューレーターに匹敵する。

資源としての微生物株は保存機関のみにあるのではなく、個人会員の実験室あるいは個人会員の手中にもある。先の例では資源としての石油は科学者が発見したが、資源としての人口は時の首相が発見した。資源としての微生物の発見はキューレーターでなくても1微生物研究者でもできる。

そこで、特に個人会員の皆様にお願ひがある。保存菌株の資源化を果たした皆さんは自分の菌株のキューレーターになって自分の実験室を保存機関として運営して下さるようお願ひする。

Title : On the Resources Produced by Microbes

Taiki Kusaka